

をフランスに到着するまで把握できていなかったが、これほど発覚が遅れた要因の一つは、薩摩藩があらかじめ幕府に対してもその統制下での出品を申し出ていたためと考えられる。幕府が薩摩藩の動きを把握できていない中、薩摩藩の展示区画は、琉球公国という一国の区画として配置された可能性が高く、そのため、幕府や商人に対して区画が広く取られているものと考えられる。こうした状況下では、幕府に対して報告が必要な区画とは認識されていなかったことだろう。

#### 4 薩摩藩の屋外展示場

フランス国立公文書館に、丸十紋のプラカードが掲げられた和風建築の写真が所蔵されている。パリ万博会場に設けられた日本の展示場の写真として知られている(図8)。軒下に掲げられている丸十紋のあるプラカードには、「GOUVERNEMENT DU TAICHIU DE SATSOUMA」とある。これが「薩摩太守政府」を意味するフランス語の表記である。通例であれば、プラカードからは薩摩藩の展示場が想定できるが、幕府と薩摩藩の政治闘争が根拠となって、薩摩藩が恣意的に丸十紋のプラカードを掲げて撮影したものであり、幕府の展示場であるとも考えられてきた。



図8 薩摩琉球パヴィリオン 1867年撮影  
フランス国立公文書館蔵

(○は筆者挿入)

結論から言えば、これは薩摩藩の屋外展示場を写したものである。日本の屋外展示場が、中国を挟んで薩摩藩が右側に、幕府は左側に設けられたことはすでに述べた。図9は、「L'Exposition universelle de 1867 illustrée」に掲載された「イギリス区画：会場俯瞰図」と題された挿絵で、日本の屋外展示場を含むエリアが描かれている。画面右側の真ん中辺りの円形の区画が中国、その上部に幕府(商人)の展示場と思われる屋根に段のついた建物がある。

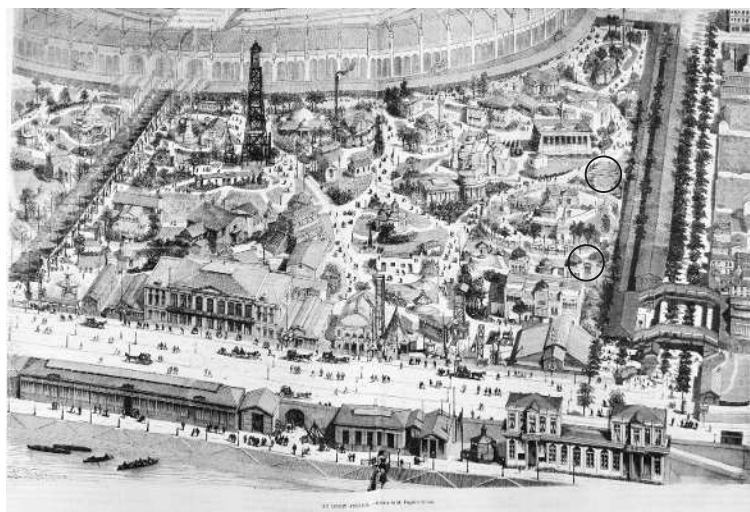


図9 イギリス区画：会場俯瞰図

「L'Exposition universelle de 1867 illustrée」  
1867年10月21日付 鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵

(見出しの下線は筆者挿入)

下部の右隅に、わずかに見える建物が薩摩藩の展示場と考えられる。

この俯瞰図には、中国と日本の区画の左方向に、ひときわ背の高い、大型の塔らしきものが描かれている。この塔は、図8の左端に写った高い塔に相当すると思われる。その位置関係から、この写真は薩摩藩の展示場と判断できる。



図10 幕府（商人）の展示場（見出し「日本：薩摩公の屋敷の内部」  
「LE MONDE ILLUSTRÉ」1867年9月28日付  
鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵

続いて、薩摩藩とは中国を挟んで反対側に設置された幕府側の屋外展示場をみてみよう。図10は、フランスの絵入り新聞「LE MONDE ILLUSTRÉ」の1867年9月28日付に掲載されたもので、幕府の呼びかけに応じて参加した清水卯三郎が同伴した江戸柳橋の芸者かね・さと・すみの3名を描いたものである。この茶屋が開店したのは、薩摩藩の茶屋の完成から遅れること2カ月の7月5日（6月7日）のことであった。茶屋風の日本家屋で、煙管で煙草を吸ったり、茶を点てたりして日本の日常生活を演じる様子は、フランスやイギリスの新聞紙上にたびたび大きく取り上げられた。

ここで注目したいのは、見出しに「日本：薩摩公の屋敷の内部」とある点である。薩摩藩の代理人モンブランは、マスコミ等に対して、薩摩をことさらに強調する広報を行うなど、いわゆるプロパガンダを行ったと言われていることから、この見出しをその事例と考えることもできよう。

## 5 薩摩藩の3種の出品目録

### (1) 長崎領事館記録

日本に残る薩摩藩の出品目録と言える史料は、長崎領事のデュリーを通じて幕府に提出された、慶応2年10月1日(1866年11月7日)付の発送分225箱についての種別を記した大まかなりスト(以下、「長崎領事館記録」とする。)である(表1)<sup>(9)</sup>。琉球産諸品、国産漆器、国産陶器、国産鋳石類、国産諸材木、国産植物、国産農具、茶器、竹細工物、反布、小間物類、その他(茶、白蠟、煙草、樟脳、硫黄)などを出品したことが確認できる。

リストの内容から、薩摩藩は薩摩と琉球の産物を出品したことが知られているものの、表1には種別しか記されておらず、詳細は分からない。また、薩摩藩はこれ以前に約250箱を独自にパリに向けて送付していることから、このリストは、全体の約半分に過ぎない可能性が高い。とはいえ、日本を出航する前に記されたリストであり、日本側の史料として確認できる唯一のものである。

分野	種別	分野	種別	分野	種別	分野	種別			
琉球産諸品	細上布	国産陶器	蓋物	茶器	火箸	反布	紋			
	縮綿		鉛		茶杓		縮緬			
	紺地木箱		錫		茶巾		短冊			
	夷座	同鉱石類	其他		服紗		筆			
	白・黒砂糖		椀		苧緑		紙			
	漆器		楯		灰斗		墨			
	藤細工盆		松		灰器		煙草入			
泡盛酒	杉		香箱		紙入					
国産漆器	提重		同諸材木		柀		竹細工物	鑲(かん)	小間物類	煙管
	重箱				柀			灰比(はいさじ)		漆盤
	奩	柀		茶壺	漆盤胸					
	吸物膳	柀		花入籠	将棋盤					
	吸物碗	柀		团扇	将棋駒					
	腰障子	柀		扇子	雙六盤					
	小襖	同植物		簾	雙六駒					
	煙草盆	同農具	風炉	燈炉						
	手拭掛		鎌	行燈						
	料紙箱		鋤	三味線						
	硯箱	茶器	碓杭	燈台						
	菓子盆		茶筌	置物						
	短冊箱		茶碗	縮緬						
	文庫		棗	羽二重						
	花台		茶入	竜門						
	肴台		水指	八丈縞						
	盆台		水次	丹後縞						
盆洗	建水		布							
茶台	蓋置		裏縞							
広台	柄杓		絹							
国産陶器	茶碗	釜	帯地	反布	帯	その他	茶			
	茶出	天目台	縮真田		白蠟					
	茶入	五徳	縮子		煙草					
	鉢	羽箆			撥灰					
									硫黄	

表1 長崎領事館記録による薩摩藩の出品目録

(2) 『総合カタログ』No.1

『総合カタログ』No.1(以下、『カタログ1』とする。)は、1867年4月1日のパリ万博の開会式に合わせて発行された、展示分野ごとに分類された参加国の出品目録である。

参加国一覧(図7)をみると、日本は、アジアとして共同の展示区画を与えられた、「Empire chinois(中国)」、「Royaume de Siam(シヤム)」、「Empire du Japon(日本帝国)」と「Principauté de Liou-Kiou(琉球公国)」とあり、一見すると、2つの国のような印象を受けるが、日本帝国が幕府に、琉球公国が薩摩藩に相当する。

『カタログ1』では、幕府に関する記述は参加国一覧の「Empire du Japon」の一行のみで、出品物の内容は全く記載がない。また、幕府の統率下で出品した商人の清水卯三郎、佐賀藩についても同様である。一方、薩摩藩については、

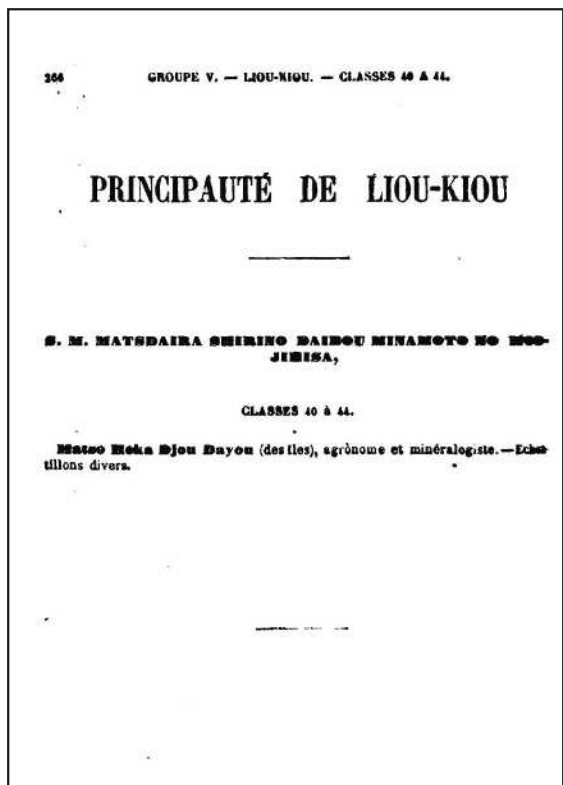


図11 「琉球公国」の出品目録(グループ5) 『総合カタログ』第1版

代表者として、「S.M.MATSDAIRA SHIRINO DAIBOU MINAMOTO NO MODJIHISA（松平修理大夫源茂久殿下）」と名とともに、展示分野ごとに出品物の内容が詳細に記されている（図11）。茂久とは、薩摩藩主島津忠義のことである。この取扱いの違いは、出品物がパリに到着した時期と関係していると思われる、幕府よりも先行して輸送を行っていた薩摩藩の出品物のみ、編集に間に合ったものと推測される。

『カタログ1』の薩摩藩（琉球公国）の出品物をまとめたのが、表2である。グループ1：芸術作品、グループ2：文化教養（リベラル・アーツ）に関する素材と応用、グループ3：家具・居住用品、グループ4：衣類・身に付けるもの、グループ5：原材料、グループ7：食料品・飲料品の分野に出品されており、それぞれの出品物の責任者、地域、種別が記されている。

表2を表1と比較したところ、表1では記載のなかった出品物があることが分かった。両者は表記方法が異なるため区別しにくいものもあるが、明らかなものを挙げると次のとおりである。

グループ2のクラス12に、藩営貨幣責任者の「シライシハチザエモン」の名前で、近代貨幣、硬貨などが出品されている。

グループ3のクラス16には、藩営工場責任者の竹下清右衛門の名で、鹿児島からコップやクリスタル製品などが出品されている。詳しくは後述するが、竹下清右衛門は鹿児島城下磯で行われていた集成館事業の責任者の一人であることから、磯で製造されていたクリスタル製品とは薩摩切子である可能性が高い。薩摩切子は、藩主島津斉彬が海外への輸出を視野に薩摩焼とともに改良・開発を行った工芸品であることから、これまで、薩摩焼のみが出品されていることに疑問が呈されて

La Commission impériale, Exposition Universelle de 1867 à Paris : Catalogue général, Paris, E. Dentu, 1867

出品目録 : PRINCIPAUTÉ DE LIOU-KIOU [琉球公国] — S. A. MATSDAIRA SHIRINO SAIBON MINAMFTO NO MODJIHISA. [松平修理大夫源茂久殿下]			
グループ1	芸術作品		
クラス3	彫刻と硬貨の彫金	Hamada Héitshi [ハマダヘイチ]	à Nagha. [那覇]
グループ2	文化教養（リベラル・アーツ）に関する素材と応用		
クラス6	書籍出版物	Iwamoto Shiobé [イワモトシオベ]	à Kagosima. [鹿児島]
クラス7	紙のオブジェ、装丁、絵画やデッサンに関する道具	Sakamoto Riodzo [サカモトリョウゾウ]	à Nagha. [那覇]
クラス10	楽器	Sandjiro [サンジロ]	à Houne-Téne. [運天]
クラス12	科学教育に関する道具と素材	Shira Issi Hatshiza Emonh [シライシハチザエモン]; 藩営貨幣責任者	à Kagosima. [鹿児島]
グループ3	家具・居住用品		
クラス16	クリスタル製品、高級ガラス窓とスタンドグラス	Také noshta Seymonh [竹下清右衛門]; 藩営工場責任者	à Kagosima. [鹿児島]
クラス17	陶器、磁器及びその他高級焼物	1. Shigué Shisa Guéne Sekki [重久玄碩] 2. SONODA SAOUA EMONH [園田沢右衛門] 3. Hougo Mhoudo [北郷ムホン] 4. Tshioséne Djine [朝鮮人]; de famille Coréenne [朝鮮の一家]	à Kagosima. [鹿児島] à Shirasa. [平佐] à Shirasa. [平佐] à Nana Shirogaoua. [苗代川]
クラス21	金銀細工品	Tshiski [漆器]	à Houne-Téne. [運天]
クラス22	銅芸術、鋳物芸術、鍍金細工数種類	Tshouse Kanh [集成館]	à Isso. [磯]
クラス26	製品、象牙（黒檀）製品、漆製品	Lai Koudjo [ライコウジョウ]（細工所か?）	à Kagosima. [鹿児島]
グループ4	衣類・身に付けるもの		
クラス27-32		Orimenodjo [織物所（織縮所）]	à Kagosima. [鹿児島]
クラス35	男女衣服	Shing-Kawa-Seyémonh [シンカワセイエモン]; fournisseur de la Cour [宮廷御用達]	à Kagosima. [鹿児島]
クラス37	携帯武器	1. Namino hira Lioukyas [波平行安] 2. Masayoshi [マサヨシ] 3. Kinoaki Keishiro [木崎啓四郎]; fournisseur de la Cour [宮廷御用達]	à Taniama. [谷山] à Kagosima. [鹿児島] à Kagosima. [鹿児島]
クラス38	旅行、野営用具	Iwasta Nambé [イワシタナンベ?] Nakadgouro-Shiogorz [ナカゴロウシオゴロウ]	à Houne-Téne. [運天] à Kagosima. [鹿児島]
グループ5	原材料		
クラス40-44		Matso Hoka Djou Dayou [松岡十太夫]; (島々の)、農業及び鉱物専門家	
グループ6	機械および製造業の方法		
グループ7	食料品・飲料品		
クラス67-73		1. Koguiwara-Sanda [カギワラサンダ] 2. Hattari Kioi Dayo [ハツタリキエウダヨ]	à Nagha. [那覇] à Houne-Téne. [運天]

表2 『総合カタログ』No. 1による薩摩藩の出品目録

きたが、パリ万博に出品されていた可能性が高い。

グループ3のクラス22には、磯の集成館から銅の細工品が出品されている。

グループ4のクラス37には、波平行安の名で鹿児島城下谷山から刀剣が、木脇啓四郎の名で鎧が出品されており、薩摩藩で製造される刀剣や鎧類が出品されていたことが判明した。

続いて、表1に記載があり、さらに詳しい情報が判明した主な例を挙げる。

グループ5には、出品物の製作責任者と思われる「Matso Hoka Djou Dayou (松岡十太夫)」の名がある。松岡は、慶応元(1865)年に英国人技師を引率して奄美大島に赴き、機械精糖工場の建設に携わり、翌年には、日本初の洋式機械紡績工場である「鹿児島紡績所」の建設を監督した。リストには、農業及び鉱物専門家として紹介されており、サンプル数種類を出品したようである。これらは表1の国産の鉱石類や諸材木、植物などに相当すると考えられる。

グループ3のクラス17では、薩摩焼が出品されたことのみ分かっていたが、『カタログ1』により、鹿児島城下の藩窯である豎野系、伊集院郷の苗代川系、そして、平佐郷で生産された平佐系の製品が出品されていたことが判明した。

このように、表1に記載のないものと、すでに記載のあるものの両者が含まれていることは、薩摩藩が2度に渡ってフランスに送った出品物が反映されていることが示唆される。つまり、表2の『カタログ1』は、薩摩藩の出品物のすべてを網羅したものと考えられるのである。

### (3) 『総合カタログ』No.2

『総合カタログ』No.2(以下、『カタログ2』とする。)は、4月21日に行われた三者協議後に発行された、『カタログ1』の改訂版である<sup>(10)</sup>(図12)。ここでは、「Principauté de Liou-Kiou (琉球公国)」の記載は抹消され、代わりに日本が「Empire du Japon (日本帝国)」にまとめられており、まず幕府の出品物が「Gouvernement du Taicoun (日本大君政府)」として記載され、次に「Gouvernement du Taisiou de Satsouma (薩摩太守政府)」、さらに「Gouvernement du Taisiou de Fizen (肥前太守政府)」へと続く。この有り様は三者協議の結果が反映されたものであり、薩摩藩が薩摩太守政府となったことを受けて、佐賀藩も肥前太守政府と名乗ることとなったことによる。

また、『カタログ1』には記載のなかった幕府統括下の出品物が詳細に記載されており、商人と佐賀藩の内容も含まれる。『カタログ1』にすでに記載のあった薩摩藩は、『カタログ2』では出品分野がさらに細分化され、説明もより具体的になっていることから、個々の出品物の姿をある程度捉えることができる(表3)。



図12 「日本帝国」の出品目録  
『総合カタログ』第2版

例えば、『カタログ1』で薩摩切子の可能性を指摘したガラス製品については、『カタログ2』では「ダイヤモンドカットの施された白と青のクリスタルのカットガラス（ルイ16世スタイル）」とさらに詳細な説明がなされており、薩摩切子と判断できる。

薩摩焼については、鹿児島（藩窯・堅野系）からは、「SATSUMA」と呼ばれる陶器数点、壺、平皿、カップ&ソーサー、大型製品と一式 数点、苗代川からは、いわゆる「satsouma」の陶器数点（香炉、花瓶、ティーカップ、芸術的作品数点）、平佐からは磁器の花瓶、平皿、小皿、急須、湯呑みと茶たく数点、そして白と青の磁器（数種類の花瓶）とある。

輸出向製品として海外にもたらされた薩摩焼の製品（薩摩錦手など）が、パリ万博の段階ですでに「SATSUMA」あるいは「satsouma」の称号を得ていたことが示唆されることは、薩摩焼の海外輸出の道程を考える上で極めて重要である。この段階で、すでにかかなりの量の薩摩焼がフランスにもたらされており、その存在が認知されていた可能性が想定される。通常、薩摩焼は第2回パリ万博での高い評価をきっかけに輸出の道を開いたと言われるが、パリ万博の段階で、「SATSUMA」の称号を得るほど、すでに知られていたとすれば、ヨーロッパなどへの薩摩焼輸出の時期はさらに遡ると考えられ、パリ万博がきっかけとなったという考え方を見直す必要がある。

#### （4）3種の出品目録から

表1～3の出品目録を比較すると、パリ万博では薩摩焼が高い評価を得たことが知られるが、数量は不明であるものの、決して薩摩焼に偏った出品だったわけではないことが分かる。パリ万博当時の薩摩（琉球を含む）で生産されていたあらゆる工芸品や産物が、パリ万博の展示分野に則して選定され、出品されたと理解できる。

したがって、これまで「長崎領事館記録」（表1）を基に言われていた「薩摩と琉球の産物」という薩摩藩の出品物の特徴は、パリ万博の出品物全体を通して肯定できることが確認できた。

また、藩営工場からの出品を示唆するものとして、藩営貨幣責任者のシライシハチザエモン（詳細は不明）、薩摩焼藩窯の重久玄碩、苗代川の薩摩太守の工場責任者、御用品の漆器などの製作を担当した細工場（所）、同じく織物を製作した織物所（織綿所）、藩営の甲冑製造所責任者の木脇啓四郎などが確認できる。さらに、近代化事業が行われていた集成館事業に関わった竹下清右衛門、松岡十太夫らの名も見える。つまり、薩摩と琉球の産物を出品するに当たり、藩営工場で生産される薩摩の工芸品などを中心としながら準備が行われ、単なる伝統的なものではなく、集成館事業において海外を意識しながら製造されていた、当時の最先端の製作物などが選定されたと考えられるのである。

## 6 薩摩藩の出品物に関する考察

### （1）薩摩切子の出品

薩摩切子は、幕末、藩主島津斉彬が近代化を目指して行った集成館事業の一環として生み出され、イギリス、ボヘミア、中国などのガラス製品に範を求め、海外輸出も視野に入れながら高度に発展を

出品目録 : EMPIRE DU JAPON [ 日本帝国 ] — GOUVERNEMENT DU TAISIOU DE SATSOUA [ 薩摩太守政府 ]				
<b>グループ 1 芸術作品</b>				
クラス 3.5	彫刻及び彫りのある硬貨・建築図面と模型・版画とリトグラフ	Hamada Heitshei [ ハマダ ヘイチ ]	à Nagha. [ 那覇 ]	彫刻と版画
<b>グループ 2 文化教養（リベラル・アーツ）に関する素材と応用</b>				
クラス 6	書籍出版物	Iwamoto Shiobé [ イワモト シオベ ] Joshino [ ヨシノ ] Asakoura [ アサクラ ]	à Kagosima. [ 鹿児島 ]	印刷物、印刷版面 イラスト入り物語集 印刷された紙製のうちわ数点
クラス 7	紙のオブジェ、装丁、絵画やデッサンに関する道具	Sakamoto Riodzo [ サカモト リョウゾウ ]	à Kagosima. [ 鹿児島 ]	異なる種類、品質の紳数種 紙布（カジノキ）、日傘、雨用紙製の傘、紙製の目よけ
クラス 1.2	科学教育に関する道具と素材	Lakio [ ラキオ ] か？ Shira Issi Hatshiza Emonh [ シライシ ハナザエモン ] : 藩 営貨幣責任者	à Kagosima. [ 鹿児島 ]	紙製ランタン数点（提灯か） 近代貨幣数点、硬貨数点、重りと秤数点
<b>グループ 3 家具・居住用品</b>				
クラス 1.6	クリスタル製品、高級ガラス窓とスタンドグラス	Také noshta Seymonh [ 竹下清右衛門 ] : 薩摩太守政府の 工場責任者	à Kagosima. [ 鹿児島 ]	ダイヤモンドカットの白と青クリ スタルのカットガラス（ルイ16世 スタイル）
クラス 1.7	陶器、磁器及びその他高級焼物	1. Shigué Shisa Guéne Sekki [ 重久玄碩 ]	à Kagosima. [ 鹿児島 ]	"SATSUMA" と呼ばれる陶器数点、 壺、平皿、カップ & ソーサー、大 型製品と一式 数点
		2. Sonoda Saonaémough [ 園田沢右衛門 ]		磁器の花瓶、平皿、小皿、急須、 湯呑みと茶たぐ数点
		3. Hougo Nihondo [ 北郷 ニホンド ]		白と青の磁器：数種類の花瓶
		4. Tshiosénéjine [ 朝鮮人 ] : 薩摩太守政府の工場責任者	à Nana Shirogaoua. [ 苗代川 ]	いわゆる "satsouma" の陶器数点： 香炉、花瓶、ティーカップ、芸術的 作品数点
クラス 2.1	金銀細工品	Ts c hiski [ チシキ ]	à Houne-Téne. [ 運天 ]	芸術的な台座付きの扇子数点、新 しい彫刻が施された青銅製の壺数 点、金の像数点、銀の腕輪数点、 彫刻が施されたパイプの先数点
クラス 2.2	銅芸術、鋳物芸術、鍛金細工数種類	Tshioseu-Kan [ 集成館 ]	à Isso. [ 磯 ]	芸術的な青銅作品数点：porte- bouquet 数点、青銅に金を施した キマイラ 像数点；青銅製の動物 像数点；亀と蛇が水晶の地球と一 緒になっている岩
クラス 2.6	製品、象牙（黒檀）製品、藤製品	1. SaiKoudjo [ 細工所（場） ]	à Kagosima. [ 鹿児島 ]	古い漆塗りの箱と引き出し付きの 家具数点、インク壺数点、お盆数 点、荷物箱数点、漆塗りの箱に 入った湯沸かし器数点
		2. Nihiro Hiitté Seyémoh [ 新納秀左衛門 ]		家具数点、箱数点：小箱と漆塗りの インク壺数点、漆塗りのゆのみ と茶托数点
		3. Shiroyama Kanoski [ シロヤマカノスキ ]		家具数点；箱数点；琉球塗りの目 新しいお盆とおブジェ数点
		4. Godjouro [ ゴジュロウ ]		漆塗りの箆笥とテーブル
		5. Hamada Heitshei [ ハマダヘイチ ]		象牙彫刻
<b>グループ 4 衣類・身に付けるもの（服飾雑貨）</b>				
クラス 2.7	綿の糸と布	Orimenodjo [ 織物所（織綿所） ] Minoda [ ミノダ ]	à Kagosima. [ 鹿児島 ]	綿、生地、糸 木綿糸と生地、各種デザイン
クラス 3.1	絹糸とシルク生地	Nomoura [ ノムラ ]		タフタ、ダマスク織、錦織、ちり めん、無地の布地、横糸に紙の糸 を使った絹の布地；簪子、ピロー ド、シンプルなピロード、毛の長 いピロード；鮮紅色のちりめん、 白地に赤のちりめん
		Orimenodjo [ 織物所（織綿所） ]	à Kagosima. [ 鹿児島 ]	シルク、生地、糸
クラス 3.3	レース、チュール織、刺繍、組紐	Orimenodjo [ 織物所（織綿所） ]	à Kagosima. [ 鹿児島 ]	シルク、金銀の刺繍
クラス 3.4	メリヤス製品と下着、衣類用アクセサリー	Sibouya [ シブヤ ]		糸まりと財布数点；人形数点（衣 装を着用）；タバコ用カバン；パ イプケース；帽子と靴数点
クラス 3.5	男女衣服	Shing k awa-Seyémoh [ シンカワセイエモン ] : fournisseur de la Cour [ 宮廷御用達 ]	à Kagosima. [ 鹿児島 ]	歩兵隊の古い衣装数点；将軍の古 い甲冑、マスキに着せた男女の 衣服数点
クラス 3.7	携帯武器	Namino hira Lioukyas [ 波平行安 ]	à Taniama. [ 谷山 ]	刀剣
		Masayoshi [ マサヨシ ]	à Kagosima. [ 鹿児島 ]	剣と鞘に豪華な装飾が施してある刀 数点；刀剣数点、弓、矢、籠付き の銃、銃尾を担いで使用する銃
クラス 3.8	旅行、野営用具	Kinoaki Keishiro [ 木脇啓四郎 ] : fournisseur de la Cour [ 宮 廷御用達 ]	à Kagosima. [ 鹿児島 ]	帽子（兜か）、籠数点
クラス 3.9	（潮などに飾る）小装品とおもちゃ	Iwasta Nambu [ イワスタ ナンブ ]	à Houne-Téne. [ 運天 ]	鞍、馬具
クラス 3.9		Nakad z ouro-Shigorz [ ナカズロ ショゴロウ ]	à Kagosima. [ 鹿児島 ]	黒い漆塗りで金を塗った銅を使っ た旅行カバン；携帯用椅子
<b>グループ 5 原材料（高級素材）</b>				
クラス 4.0	鉱山開発と製鉄業製品	Matso Hoka Djou Dayou [ 松岡十太夫 ]		Yonégasima 硫黄、石炭
クラス 4.1	森林開発用製品	Matso Hoka Djou Dayou [ 松岡十太夫 ]		樟脳；木材
クラス 4.2	狩り、釣りおよび狩猟採集用製品	Matso Hoka Djou Dayou [ 松岡十太夫 ]		麝香
クラス 4.3	農業（食用でないもの）および保存製品	Matso Hoka Djou Dayou [ 松岡十太夫 ]		刻んだ葉たばこ 国分たばこの 葉；紙布の材料；麻；梧桐の皮； 食用キノコの原木；植物性ワック ス（白飯だらう）；繭と絹糸のサ ンプル数点、本綿の見本
		Gasseau [ ガッソウ ]		薩摩の蕨の標本
クラス 4.4	化学および製薬製品	Matso Hoka Djou Dayou [ 松岡十太夫 ]		いわゆる中華インク（墨か）
<b>グループ 6 機械および製造業の方法（工業技術）</b>				
クラス 4.8	森林および道路開発のための器具と道具	Matso Hoka Djou Dayou [ 松岡十太夫 ]	à Kagosima. [ 鹿児島 ]	農業用具
クラス 5.4	工作機械	Matso Hoka Djou Dayou [ 松岡十太夫 ]	à Kagosima. [ 鹿児島 ]	大工道具
<b>グループ 7 食料品・飲料品</b>				
クラス 7.2	薬味と香辛料：砂糖とジャム類	Ko z iwara Sanda [ カギワラ サンダ ]	à Nagha. [ 那覇 ]	みやこのじやの茶
		Hattari Kioudayo [ ハッタリ キョウダヨ ]	à Houne-Téne. [ 運天 ]	たきのと（茶、食用竹）；ソーヤ （醤油）；食用の海藻

表3 『総合カタログ』 No. 2 による薩摩藩の出品目録

遂げた。透明ガラスの上に、紅や藍などの色ガラスを被せ、そこにカットを施して文様を表現するもので、カット面に現れるグラデーション、いわゆる「ぼかし」が特徴である。なかでも、暗紅色をした紅ガラスは、日本で初めて発色に成功したもので、「薩摩の紅ガラス」として幅広く賞賛された。

薩摩藩でのガラス製造は、弘化3（1846）年、藩主島津斉興が城下に中村製薬館（現鹿児島市鴨池町）を創設し、硝酸などの酸類や医薬品の製造を開始したことに始まる。強い酸にも耐えるガラス器の必要性から、江戸のガラス職人四本亀次郎を招いて薬瓶の製造が試みられた。

嘉永4（1851）年、島津斉彬が藩主に就任すると、紅や藍などの色ガラス、酸に強い硬質ガラス、艦船用の板ガラス、カットガラスなどが作られ、ガラス製造は飛躍的に成長を遂げる。安政2（1855）年、磯の集成館に築かれたガラス工場には、銅赤ガラス窯2基、金赤ガラス窯2基、クリスタルガラス窯1基、板ガラス製造窯1基、鉛ガラス製造窯数基があったという。

安政5（1858）年、斉彬が急逝すると、集成館事業は大幅に縮小され、文久3（1863）年の薩英戦争で灰燼に帰した。その後、ガラス工場は再建され、パリ万博当ても操業を続けていた。

しかしながら、出品物が長崎から送り出された際の記録である表1には薩摩切子の記載がないことから、これまで薩摩切子はパリ万博に出品されていないと考えられてきた。しかしながら、パリ万博の出品目録である2種の『総合カタログ』には、薩摩切子と考えられる記載があることはすでに述べたとおりである。『カタログ1』（表2）には、クラス16のクリスタル製品、高級ガラス窓とスタンドガラスの部門に、鹿児島（城下）から「コップ製造、クリスタル製品、工場製品数種類」が出品されており、「藩営工場責任者」として「Také noshta Seymonh」とあるのは、「竹下清右衛門」を指すと考えられる。さらに『カタログ2』（表3）ではより具体的な記載となっており、「薩摩太守政府の工場責任者」として竹下の名があり、出品物に「ダイヤモンドカットの白と青クリスタルのカットガラス（ルイ16世スタイル）」とある。

竹下清右衛門は、元治元（1864）年に始まる集成館の復興事業において、機械工場の建設掛に任命されていた人物であることから、ガラス製品の部門へは、集成館で製造されていたクリスタル製品が出品されたものと理解できる。当時の集成館ではクリスタルガラスにさまざまなカットを施し、透明ガラスに赤や青といった色ガラスを被せる技法を特徴とした薩摩切子が製作されていた。「ダイヤモンドカットの白と青クリスタルのカットガラス」という出品物は、正に薩摩切子を示していると考えられる。つまり、薩摩切子はパリ万博に出品されていたと判断できるのである。

万博への薩摩切子出品については、英国公使パークスが慶応2（1866）年6月にガラス工場を訪問したときの記録<sup>(11)</sup>に、次のようにある。

硝子製造所ニ至テ、硝子器ヲ製スルヲ見ルニ、其ノ巧ナル、日本ニテ今ヨリ後製造物ニ長スルハ、此国ノ人ニ在ルコト明ナリ、当今ニテスラ其製造物ノ一ニハ、西洋ノ博覧会ニ出シテ恥シカラヌ程ノ手際ナリ、

パークスは薩摩切子の出来映えを、西洋の博覧会に出品しても恥ずかしくないほどの手際と絶賛している。また、朱書で「博覧会ニモ出セリ」とある。この博覧会とは、1867年パリ万博のことであろう。薩摩藩は、慶応元（1865）年、すでに万博への参加を決定していた。パークスが訪問した時期、パリ万博出品物の製造が行われていた可能性が考えられよう。